Living the Lotus 11

Buddhism in Everyday Life

2024
VOL. 230

9月15日、サンフランシスコ教会 発足45周年記念式典を開催

Living the Lotus
Vol. 230 (November 2024)

【発行】立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124　Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp
編集責任者: 赤川 惠一
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の経典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生かし、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鑛会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life（法華経を生きる～生活の中の仏教）というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

会長法話

出会いが育てる――
敬する心・恥じる心 ①

庭野日鑛
立正佼成会会長

敬う心を発達させる

昨年のいまごろ、私は「人間が進歩向上する一番大切なことは敬う心を発達させることであり、恥を知ることである」（安岡正篤師）という言葉を引用して、本会の今年の方針をお示ししました。偉大なるものに近づきたいと願う心は、信仰をもつ者だけではなく、すべての人にとって大切なことで、また人間同士が敬いあうことは社会を平和にしていく根本であるからです。

しかし、かねてお伝えしているように、自分を敬うことができない人は、人を敬うことはできないといわれます。そういう私自身も、自分を敬することができているかと問われると、それはとても難しいと答えるのが正直なところです。

それでも、これも何度かお話ししていますが、合掌印を結んで拝みどおしに拝んでくださっているわが家の仏さまのおかげさまで、私は自らの尊さを自覚しています。毎朝毎晩、仏さまと向きあい、合掌礼拝するたびに、恥ずかしながら「私も仏さまに拝まれている」ということをかみしめているのです。

今年、私は書き初めでも「畏敬」と揮毫しました。それはもちろん、敬う心の大切さを思ってのことです。ただ、畏敬というと神仏や宇宙や大自然など、人間の知識・能力がはるかにおよばない存在やはたらきに対する「畏れ」と「敬い」がイメージされます。歴史上の聖人や賢人・偉人を敬う心もそのなかに含まれるでしょうが、そのいっぽうで私は、日ごろから接する人やものごとなどの身近な「出会い」の一つ一つが畏敬の対象であって、敬う心は日々の生活のなかでこそ育つのだと思うのです。

出会いは心の栄養

たとえば親子の場合、親の一方的な見方で正しいと思って子を叱ったり怒ったりすることが多いためか、孟子が「君子は子に教えず」というくらい、親子のあいだで敬う心を育む難しさが昔からいわれます。私は、親子といえども一人ひとり個性があって、それぞれに違いますから、そうしたことをお互いに感じあえたら、親は子の個性を尊んでいけばいいのだと思っています。そして親は、言うこととやることに違いがない「言行一致」の姿勢を忘れないこと――それが、親子がともに敬する心を育むあり方だと思うのです。

敬するというと、私たちはその対象としてつい「上」のほうにばかり目を向けがちです。ところが、自分と横並びの人や年齢が若く経験が自分より浅い人も、敬する心を養ってくれる大切な方々だということです。これはまた、夫婦や友人関係でも同じです。大事なことは、相手の個性を認めてその長所・美点に感応し、称え、見習うことであって、それが自他の敬う心を育てるのです。そのように受けとめると、すべての出会いが敬する心を育てる栄養で、それは常不軽菩薩の礼拝行にも通じるものだと思います。

経営の神様といわれた松下幸之助さんは、「天地自然、この世の中、敬う心があれば、敬うに値するものは無数にある」（『道をひらく』／ＰＨＰ研究所）といいます。しかも「人間には、ものみな、人みなのなかに敬うべき価値を見いだす能力が与えられている」（同）と述べたうえで、その能力を生かし、互いに敬う心を高めようと呼びかけるのです。

ただ、「この敬の心が発達してくると、必ず相対的に自分の低い現実を顧みてそれを恥じる心が起きてくる」（安岡正篤師）とも教えていただきます。出会いは、恥を知るというもう一つの大事な心をも育てるのです。私たちにとって大切な出会いの一つ、布教伝道の意義とともに、次号では「恥じる心」について考えてみたいと思います。

（『佼成』2024 年 11 月号）

Interview

仏さまの教えで、みんなが仲よく、幸せに

ロシア・サハリン法座　チェ・カプスン

立正佼成会には、いつごろ、どのようなきっかけで入会されたのですか？

私が立正佼成会に入会したのは2014年11月です。前年に夫を亡くし、悲しみに暮れていた私のことを心配した親戚のパク・オクヒさん（現・韓国在住）が、立正佼成会の信仰を勧めてくれたのです。しかし、私はそれまでロシア正教を信仰していたので仏教団体である立正佼成会に入会することを躊躇っていました。《果たしてロシア正教から仏教に改宗してもいいのだろうか》。そして一年後、いろいろと考え抜いた結果、《ご先祖さまに思いを馳せることは大切なことだし、亡くなった夫や両親の供養にもなるだろう。とにかく一度、立正佼成会に行ってみよう》と思い、パクさんに伴われ、立正佼成会のサハリン法座所を訪れたのです。サンガの皆さんは私を笑顔と合掌で温かく迎えてくださり、初めてお題目を唱え、お経を上げ、会員さんたちのお話を聞きました。その時、なぜか不思議なくらいビッショリと汗をかいたのですが、その汗はとても心地よいものだったことを覚えています。

その後、入会を決意されたのはなぜですか？

その後、パクさんからご供養の時に使用する『経典』（ロシア語訳）を手渡されたのです。パクさんは私に会うたびに「『経典』読んでみた？最初は少し難しいかもしれないけれど、くり返し読んでいくうちにきっと素晴らしさがわかるからね」と何度も言っていました。そのパクさんの言葉に促されるように『経典』を読み進んでいくと、私なりの理解でしたが、私たちがなんのために生きるのかが明確に説かれている法華経の奥深さや素晴らしさを知り、入会を決心させていただいたのです。

毎日、どのような気持ちでご供養をされていますか？

立正佼成会の基本信行と言われるご供養は、仏さまとご先祖さまに感謝の心を捧げる行ないだと受け止めています。それは言い換えると、私が今、いのちがあることはとても有り難く、生かされていることに感謝せざるを得ないということです。でも正直に言いますと、朝は時々、仕事へ行く身支度などで時間がなくなって、ご供養ができない時があるんですね。そんな時は、仕事から帰宅後、その日一日に感謝の気持ちを込めて、経文を味わうようにご供養をさせていただいています。

チェ・カプスンさん

ご供養をとおして功徳と感じた体験はありますか？

私は以前、韓国料理店の厨房で料理を作っていました。すごくストレスのかかる仕事で、嫌なこともたくさんあり、心身ともに疲れ切った中で帰宅し、本当につらいなと思うこともありました。しかし、ご宝前で一心にご供養をさせていただくと、だんだん心が落ち着き、とても安らかな気持ちになりました。そして、ぐっすり眠れ、翌朝もすっきりと気持ちよく起きられ、仕事に対しても意欲的に取り組むことができたのです。そうした体験をとおして、ご供養は仏さまに感謝を捧げるとともに、『経典』の読誦をとおして仏さまと対話をしているのだと実感させていただきました。

法華経の中で心に留めている教えはありますか？

法華経の常不軽菩薩品には、常不軽菩薩がどんな人に対しても仏性礼拝する姿勢が説かれていますが、私はこの

徹底した礼拝行に感動し、心の支えにしています。この品の中で常不軽菩薩は「私は、あなた方を敬います。あなた方は必ず仏になれる人です」と一心に人々の仏性を拝み続けました。しかし、常不軽菩薩にそう言われた人々は、バカにしていると怒ったり、軽蔑したり、罵ったりしました。中には石を投げる人や杖で叩く人も現れました。それでも常不軽菩薩は「あなた方は必ず仏になれる人です」と、ひたすら根気強く礼拝行を続け、ついに仏になられました。目標は大きく、とても難しいことだと思いますが、私もこの常不軽菩薩をお手本にして、常に敬いの心を持って人と接し、ひとつのことを根気強く実践し、努力し続けられる人間になれるよう精進していきたいと思っています。

立正佼成会の教えで大切にしている言葉はありますか？

開祖さまは、ご法話の中で「自分が変われば相手が変わる」とおっしゃっています。私はこのお言葉がとても好きで、素晴らしいと思っています。私たちは家庭や職場、地域などにおいて、自分が変わる前に相手を変えようとして、その結果、対立や争いにつながってしまうことがあります。でも、よく考えてみると相手を変えることはできません。瞬時に変えられるのは自分の心です。相手を変えようとするより、まず先に自分が変わる努力をする。そのように自分が主体的・積極的に変わっていく姿は、とても尊く、素晴らしい人間の生き方だなと思っています。

サハリン法座所のご宝前の前でサンガの仲間と（前列右）

サハリン法座所で、ご宝前の仏具を磨くチェさん（左）

立正佼成会のどういうところに魅力を感じますか？

サンガの仲間に最も魅力を感じますね。みんなで法座所に集い、みんなでお経を上げ、みんなで語り合い、交流することは、とても意味のあることだと思います。サンガの仲間がいるお陰さまで、お互いに助け合い、励まし合い、支え合うことができます。そして明るく、楽しく、有り難く仏さまの道を共に歩めるのだと思います。特に法座修行を通して、人生の悩み苦しみ、喜びをお互いに共有しながら法を学び合い、切磋琢磨の場として人間的に成長できることが有り難いと思っています。

最後に今いちばん願っていることを聞かせてください。

ひと言で言えば、仏さまの教えで、みんなが仲よく、幸せになってもらいたいということですね。これからもサハリン法座所のサンガの皆さんと力を合わせて、一人でも多くのサハリンの人々にこの尊い教えを伝え、幸せになっていただきたいと思います。また個人的なことを言えば、5人の孫がこれからも元気に育って、健康でやさしい人間に成長してくれることを心から願っています。

まんが立正佼成会入門

教団の行事

創立記念日

3月5日は立正佼成会の創立記念日です。

1938年（昭和13年）3月5日、立正佼成会は法華経をよりどころとして、人びとの救いと幸せを願って創立されました。

創立当時の会員は三十人たらずでした。それが、いまでは海外にまで会員を有する大きな教団になりました。それは会員たちが教えを学んで幸せになり、その喜びを多くの人に伝えていったからです。

この日は、大聖堂と全国の教会で創立の意義をかみしめ、教えを広める誓いを新たにします。

※私的使用を除き、無断で複製・転載をしないでください。

『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。
https://www.koseishop.com/

青年の日

立正佼成会には青年部があります。ここには、小学生の少年部、中学・高校生の学生部も入ります。青年部が、毎年５月の第三日曜日を中心に全国各地で行動を起こすのが「青年の日」です。

この日、各教会では地域の要望にこたえて、清掃奉仕や福祉施設でのお年寄りとのふれ合い、平和や環境問題をうったえるイベント、バザーやフリーマーケット、ユニセフ（国連児童基金）の街頭募金などを行ないます。また、統一プログラムとして正午から一分間、「平和の祈り」をささげます。

豆知識

「青年の日」の活動は 1970 年（昭和 45 年）５月、「全国青年部県別統一行動」という名でスタート。「明るい社会づくりは、われわれの手で」をスローガンに、交通安全キャンペーンや献血、清掃奉仕が行なわれた。

※私的使用を除き、無断で複製・転載をしないでください。

仏さまに生かされて

生死は仏の御いのち

立正佼成会開祖　庭野日敬

仏教では「生・老・病・死」を「苦」の代表として「四苦」と呼びます。実際、人生にはいろいろな苦労がつきものです。そういうなかで、お互いさまに健康で生きていられて、菩薩行に精進できる。これは自分の力ではなく、仏さまに生かされてのこと、というほかありません。また、私たちは自分が幸せなときに、「仏さまに守護されている」「仏さまに生かされている」と思いますが、そうではありません。

思わぬ大病をした、家族が交通事故に遭った、会社が倒産したというようなとき、私たちは仏さまに見放されたような思いになりがちです。ところが、そういうときこそ、仏さまが救いの手をさしのべてくださっているときなのです。

ある壮年の方が、こんな体験説法をされたことがあります。その人はレストランを手広く経営していたのですが、次第に借金が増え、お店を一軒、二軒と手放さなければならなくなります。そのうえ自分も大病で手術を受けることになって、絶望の淵に沈みます。それでも、どうにか手術も成功し、少しずつ健康も回復しました。ある朝、目がさめたとき、鳥のさえずりが耳に入ってきます。「ああ、私は生きている」と思った瞬間、以前に幹部さんから聞いた「あなたは仏さまに生かされているのですよ」という言葉を思い出すのです。

それまで、自分の力で会社を大きくし、どんな苦難も切り開いてきたと思っていたその人が、それからというもの、「仏さまに生かされていることに感謝できる毎日に変わった」というのです。

私たちは、悪いことが何も起こらず、よいことが続くことを願いがちです。そして、そういう状態が続くと、それが自分の力であるかのように思います。ところが、「私は自分の力で生きているのだ」とかたくなに身構えていると、仏さまのご守護も頂戴できなくなり、娑婆の「苦」に追いまわされることにもなるのです。

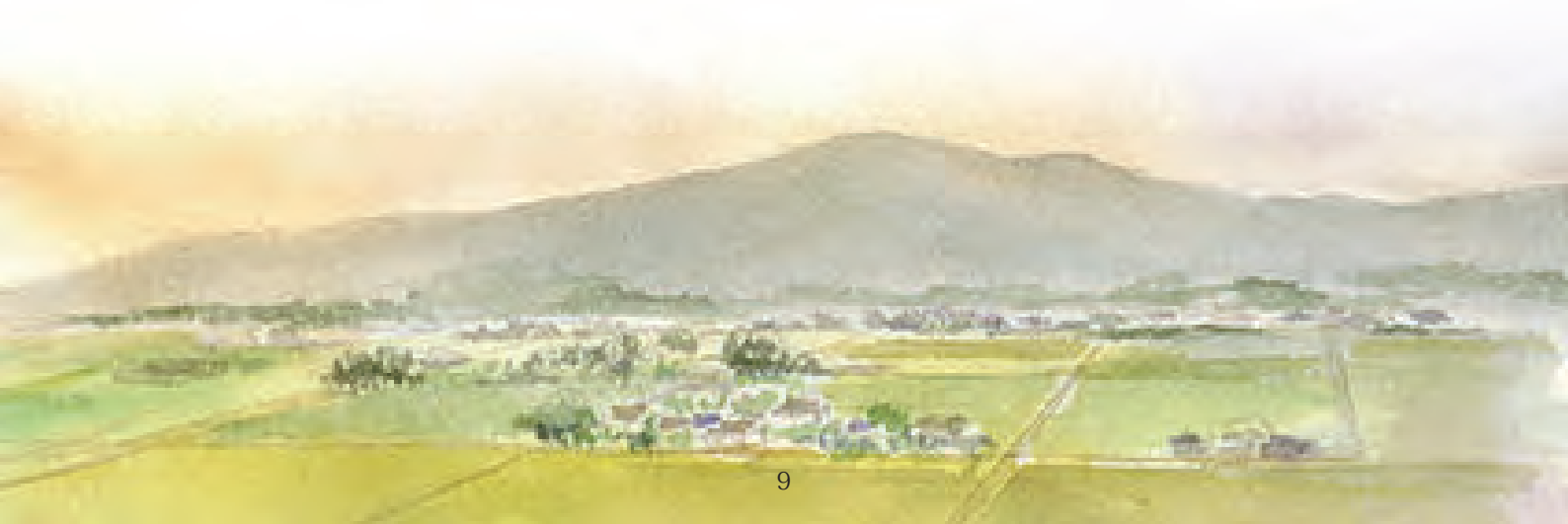
道元禅師は『正法眼蔵』のなかで、「この生死は、すなわち仏の御いのちなり。これをいといすてんとすれば、すなわち仏の御いのちをうしなわんとするなり」と説いています。

これは、「生老病死」をはじめとするもろもろの「苦」が、そのまま仏さまの「お慈悲」であるということです。何はともあれ、私たちは仏さまの「御いのち」を頂戴して生まれてきたのであって、病むのも、老いるのも、そして死んでいくのも、そのまま仏さまの「御いのち」であり、仏さまの大慈悲のまっただなかにある、ということです。

「苦」があればこそ、そこから救われたときの喜びがあるのです。そしてその「苦」は、

仏道を歩むという、人間にとってほんとうの幸せに導いてくださる、仏さまの大慈大悲の「お手配」にほかならないのです。

庭野日敬平成法話集 1『菩提の萌を発さしむ』P.61-63



Director's Column

すべての出会いをわが師として

国際伝道部長
赤川惠一

みなさん、こんにちは。日本では秋が深まり、全国各地で紅葉の見頃を迎えております。読者の皆さんはどのような11月をお過ごしでしょうか。

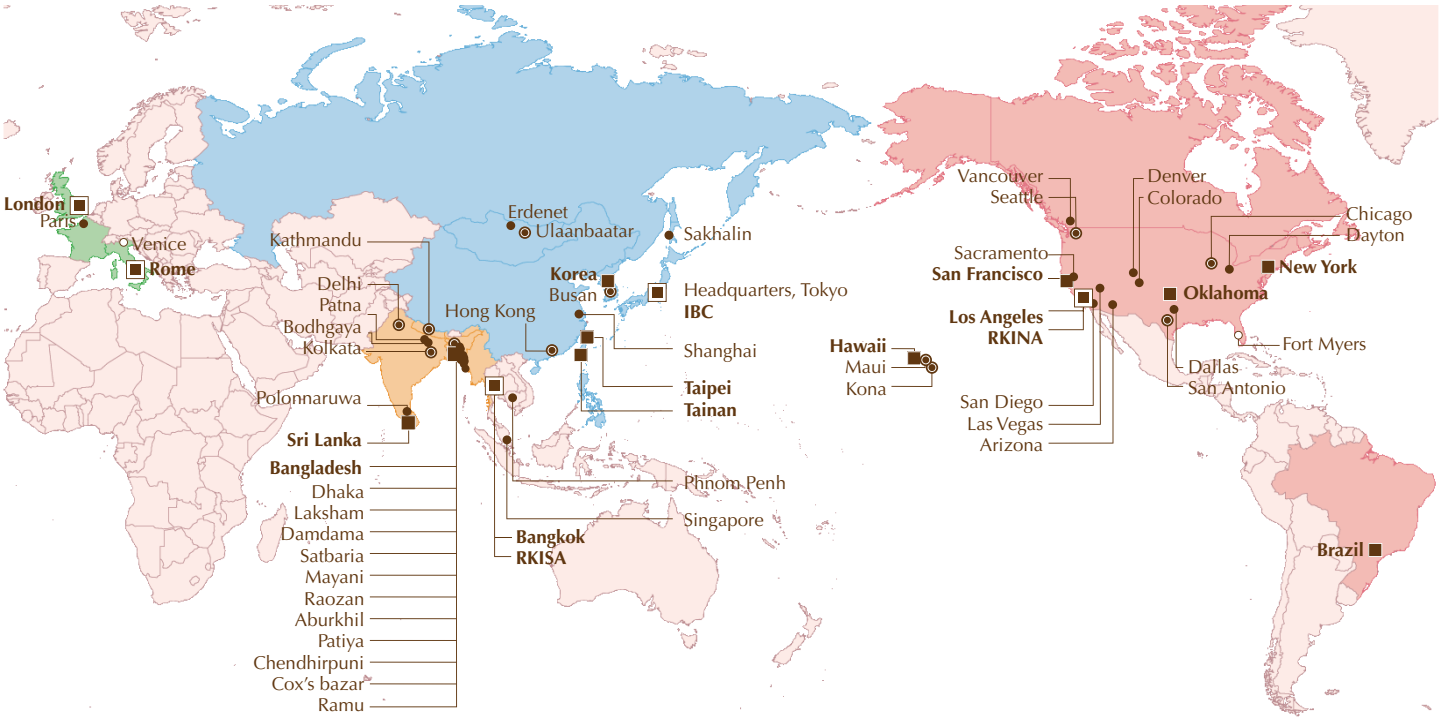
さて、会長先生は今月のご法話で本年次の本会の方針にふれながら、「敬する心」と「恥じる心」の大切さをお示しになり、すべての出会いは敬する心を育てる栄養となることを教えてくださいました。出会いというご縁の受け止め方は、相手や場面により異なるものですが、まさにそこにこそ、修行者・求道者としての私たちの心の在り方が求められていると感じます。出会いを自己中心の心で受け止めるか、感謝や謙虚な心で迎えるかでは、その果報に大きな違いがあろうことは容易に想像できます。

私は毎月のご法話を拝読するたび、会長先生が四十年以上前に上梓された『すべてはわが師』の文章を思い出します。そこには法燈継承前の会長先生の心情が描かれ、すべての出会いをわが師とされた宗教者としての基本姿勢が示されています。気持ちの良い秋の休日に、この素晴らしいご著書をあらためて手に取り、静かに読み返してみようと思います。

ご法話で教えていただいたように、今月はすべての出会いを「敬する心を育てる栄養」と受け止め、常不軽菩薩の礼拝行を実践してまいりたいと思います。

東京の普門メディアセンターで行なわれた御本尊授与式で、赤川部長から御本尊を授与される北米国際伝道センターの吉澤センター長（右上）とコルカタ支部のバルア教務員（左下）

A Global Buddhist Movement



Information about local Dharma centers

facebook

We welcome comments on our newsletter *Living the Lotus*: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp